

香港にイモ 試験輸出 豊作時の在庫消化へ

2019年4月4日

カルビーポテト（帯広市、中村一浩社長）は、十勝などで生産されたポテトチップス原料用のジャガイモの試験輸出に取り組んでいる。国内で供給過剰となる豊作時も安定した価格で買い取り、農家が安心して増産できる体制を目指す。試験での課題を整理し、本格実施に向けた検討を進める。



輸出され、香港で荷下ろしされるジャガイモ(カルビーポテト提供)

同社は全国1800の農家（8000ヘクタール）と契約し、ジャガイモを調達している。道内は1000戸（6300ヘクタール）と契約、十勝が半分以上を占める。ポテトチップスの需要は年々高まっており、国内生産分だけで賄えるのは全体の9割と、原料が不足している状況にある。

親会社のカルビーは消費者の国産志向や、原料・輸送コスト、品質面を考慮し、輸入原料を減らす方針。2017年の台風被害を契機に原料不足となり、店頭から商品が消える「ポテチショック」が起きた。不作時でも製品を安定供給する観点で、国産原料の増産が不可欠となっている。

過去の豊作時には在庫の消化に苦慮したこともあり、国内で使い切れない分を海外に回すことで、安定的に買い取り、農家の生産意欲を高めてもらう。

国内では供給不足を背景に、ジャガイモの輸出はほとんど行われていないのが現状。海外も病害虫が侵入する恐れがあるため、農業が盛んでない国を除き、ほとんど受け入れていない。同社は2～3月、条件が整った香港に初めて輸出。芽室町の倉庫に保管していたジャガイモ24トンを、苫小牧港から送った。

現地に届くまで2週間ほどかかり、国内での輸送に比べて倍以上の時間を要したが、品質に問題はなかった。一方で、梱包（こんぼう）に手間がかかり、改善の必要があるという。同社は「大きなトラブルなく輸出でき、手応えがあった。しっかり原料のジャガイモを買って、うまく使っていく方法を考えたい」としている。

「とかち太郎」栽培開始 川西長いも発展担う新品種

2019年5月14日

J A帯広かわにしなど管内9 J Aで生産する「十勝川西長いも」で、今年から新品種「とかち太郎」の栽培が始まった。開発に20年を要した新品種は以前より太い「とっくり型」で、生産量は2割増を見込む。2カ年で新品種に切り替える予定で、需要が高まる外国への輸出に対応、販売額は現状より約10億円アップの80億円超を目指す。

◆収量が2割増 輸出拡大期待 来年産で全面切り替え

帯広川西地区のナガイモ栽培は1971年に1.5ヘクタールからスタート。「十勝川西ながいも」は現在、9 J A管内の540ヘクタールに拡大、年間で約2万トンが生産されている。

「とかち太郎」は従来品種と比べて長さは60センチほどと変わらないが、直径は約7センチと0.5～1センチ程度太い。これに伴い収量は2割増になる。とかち太郎に完全に置き換わる20年以降、9 J Aの生産量は2万4000トンとなる見通しだ。

期待されるのは輸出の拡大だ。ナガイモは中国文化圏で健康食材として用いられ「十勝川西長いも」もアメリ



とかち太郎の導入で「輸出を増やしたい」と語る有塚組合長